

二〇二六年度入学試験問題（第二回）

国語（五十分）

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」 はそれぞれ一字と考えなさい。

著作権に関する注意

本校の入試問題は著作権の対象となっており、著作権法で保護されています。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。

お断り

本校の入試問題中で引用した文章・文献等について、著作物保護の観点から一部掲載を控えた箇所がございます。御了承ください。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学生の真潮は、クラスメイトとトラブルになると、おこつてワーツと急転して暴れることから「ワーツくん」と呼ばれてしまう。母と二人で生活していたが、真潮を置いて母は仕事で大阪に行つたと祖父に聞かされ、山口県の祖父のもとで過ごすことになる。ある日、真潮は祖父の知人の子である希沙の家へ、連絡をせずに遊びに行く。

キャップをかぶり、ゲームやタオルや財布を入れたリュックを背負つて家を出た。

ブレーキをかけながら、ゆつくりと坂道を下る。下りきつたところで左右を確認して道路をわたり、右に曲がつて少しずつスピードを上げた。

強い日差しが、ハンドルを持つ手や腕にじりじりと照りつけた。

東萩駅を横に見ながら、松本川にかかる橋をわたつた。潮のにおいをふくんだ風が気持ちいい。ふたつ目の信号を右折して、そのまま大きな通りを進む。この間おじいちゃんと来たスーパ―を過ぎ、お寺やおすし屋さんの前も通る。

ぼくが加瀬谷に着いたら、希沙はきつとおどろくだろう。いや、当たり前のような顔をして、「よっ」と笑うかもしれない。またカメラを見せてもらおう。それからゲームをするか、一緒に自転車でどこかに行こう。そう思ったら、自転車をこぐ足に力が入った。

シャッターが閉まつた店が並ぶアーケードをぬけると、見覚えのある小さな教会があつた。その先の古い通りが、おじいちゃんと歩いた道だ。黒い瓦をのせた白壁の塀、なまこ壁の家。それから木造の建物ばかりが続く中に、加瀬谷が見えたときにはほっとした。

店の前に自転車をとめて、道の端ぎりぎりまで寄せた。キャップと頭のすき間から流れてくる汗を、Tシャツのすそを引っぱつてふき、深呼吸した。

ゆつくりと引き戸を開けると、冷たい空気が鼻から胸の奥まで入ってくる。カフェにはお客さんが三人ほどいて、お茶を飲んでいるようだった。

「あら……真潮くんよね？」
と、希沙のお母さんが近づいてきた。

「はい、こんにちは」
緊張して、声が小さくなつてしまう。

「希沙ちゃん、いますか？」

ぼくが言うと、希沙のお母さんは、三日月のような形に細めていた目を大きく開いた。

「えっ、遊びに来てくれたん？　ひとりで？」

「はい」

とぼくがうなずくと、希沙^Aのお母さんは大切なお皿を割ってしまったときのような顔になった。

「希沙、友だちの家に行ったんよ。グループで自由研究せんといけんみたいで、ここ三日はずっとそう」

家を出るときから、胸の中でわくわくと動いていた何かがぴたりと止まった。

おでこから汗が流れてきたから、もう一度Tシャツのすそでぬぐった。それを希沙のお母さんが見ていることに気づいて、はずかしくてたまらなくなった。

いや、はずかしいのはここまで張り切ってやってきて、こうしてつつ立っているからなのかもしれない。

希沙は、ぼくが行ったらきつと喜んでくれるだろうとか、一緒にどこかへ行ってみようなどと考えていた自分がかばかみだ。

希沙のお母さんは、すごく申し訳なさそうに、

「本当にごめんね。アイスクリームがあるから、中で食べていって」

と言って、ぼくの前にスリッパを並べてくれたけど、ぼくは首をふってあとうざりした。

「いいです、もう帰ります。ちょっと、自転車で来てみたかっただけやけん」

と無理に笑い、くるりと反対を向いて外に飛び出した。

^B強い光と熱い空気が、ずしんと重く感じられる。

スタンドを上げて自転車に乗ったところで、希沙のお母さんも出てきて、

「ねえ真潮くん、やつぱりちよつと休んでいって」

と言ったけれど、ぼくはかまわずペダルに置いた足をふみ下ろした。とにかく早く、そこから離^{はな}れたかった。

遊びに行ったら、希沙がいなかった。ただそれだけのことだ。それなのに、どうしてこんなに悲しくて腹立たしい気持ちになってしまうのだろう。

希沙に、ぼく以外の友だちがいるのは当たり前のことだ。ワーテンくんなんて呼ばれているぼくとはちがう。

でも、それなら「いつ来てもいいよ」なんて言わなければいいじゃないか。

加瀬谷から逃げるように自転車を走らせ、細い通りをぬけて道路をわたった。このまま家には帰りたくない。しばらくこの周りを走ったら、さつき言った「ちよっと、自転車であてみただけ」が本当になると思った。

ハンドルを右に向けて進んでいくと、海が見えてきた。鼻の奥に感じるしょっぱさが、潮風のせいなのか汗のせいなのかわからない。頭が少しぼうつとしてきた。

(中略)

川の向こうに着いてふと顔を上げると、道路の反対側を歩く人が目に入って、思わず急ブレーキをかけた。

白いブラウスにうすいグレーのズボン、少しくせのある栗色の髪が肩にかかっている。ぼくはその背中に向かって、「母さんっ」

とさげんだ。とめた自転車にまたがったまま、両足のつま先を地面につけて、

「母さん、母さん！」

と、大声で何度も呼んだ。

その人はやっとふり返り、ぼくを数秒見たあとで、何もなかったようにまた歩きだした。ぜんぜん知らない人だった。後ろ姿は、あんなに母さんにそっくりだったのに。

はずかしさなんて感じるすきもないくらい、ぼくの気持ちにはしぼんでいった。

道路の向こうには駅がある。ぼくはハンドルを交差点に向け、信号が青になるのを待って道をわたった。もし母さんがぼくを迎えに来るとしたら、まずこの駅に降り立つはずだ。そう思いながら、駅の駐輪場に自転車をとめた。

駅の中は思ったよりずっとせまくて、人もあまりいなかった。

母さんがどっちから来るのかなんてわからないけど、改札はひとつしかない。その前のベンチに座り、リュックの中からスポーツドリンクを取り出して、残りを飲みほした。電車が着いても、改札から出てくる人は少ない。そしてもちろん、その中に母さんはいなかった。

母さんがここを通るなんてありえない。母さんは今頃大阪にいるのだから。そんなことはわかりきっているのに、ぼくはそこから離れられなくなってしまった。

次の電車からは、部活帰りみたいなかつこうの中学生や高校生たちがにぎやかに降りてきた。楽しそうな笑い声は、ぼくとは別世界の人のものみたいだ。

(中略)

駅員から声を掛けられるが、真潮は振り切って逃げてしまう。

バクバクと鳴る心臓を落ち着けるため、思いきり空気を吸いこんでから、ペダルをふんだ。足が重くて痛かったけど、今のぼくは、とにかくおじいちゃんの家を目指すしかない。

後ろから来る車のヘッドライトに照らされながら、前に進む。

次々と車にぬかされていると、自分が小さな虫になって、同じ場所ですっともがいているような気になった。

それでもなんとか進んでいって、もう少しで坂道だ、と思ったところで、

「真潮っ！」

と、低くて大きな声が耳にひびいた。うす暗くなった坂の下に立ち、おじいちゃんがこつちを見ていた。

D おじいちゃんは、ぼくがおそくなってしまうことを、きっとおこっているだろう。心配をかけて悪かったとは思うけど、今は素直に謝る気持ちになれない。

ぼくはおじいちゃんの前を無言で通りすぎると、家の前

に自転車ガタンとたおして、そのまま坂道をかけ上った。

「真潮っ」

背中の方からまた、おじいちゃんの声がする。

まっすぐ事務所まで行き、勢いよく戸を開けて中に入っ

た。
それから薪焼が並んだ棚の前に立ち、花入を両手でつかんでふり上げた。母さんに似た、あの花入れだ。

力いっぱい、たたきつけてしまいたかった。

E それを粉々に割ってしまえば、ずっとぼくの心の中で小さくなったり大きくなったりしている炎のほのおようなものが消える気がした。

あるとき、「いつ来てもいいよ」と言った希沙。家に帰ってこなくなった父さん。めそめそと泣くばかりで、何も言わずにぼくの前からいなくなった母さん。

みんな勝手すぎる。勝手すぎる勝手すぎる勝手すぎる。

ふいに入り口の方から、クウンという声が出た。その声は、真空みたいになっていたぼくの胸に、空気をすうっと送りこんでくれた。

花入をふり上げたまま顔を向けると、そこにはブドウのつぶのような目でぼくを見つめるタビと、おじいちゃん

が並んで立っていた。

おじいちゃんは、大事な作品をふり上げるぼくを見ても何も言わず、ただそこにいるだけだ。

体から力がぬけていく。

ぼくはゆっくりと手を下ろし、花入れを元の場所にもどした。

そのままうつむいていたら、しばらくして

「おかえり」

と、おじいちゃんが言った。それからタビと一緒に近づいてくると、

「よう帰ってきたな、こんなに汗かいて」

と、ぼくの頭からキャップを取って、首にかけていたタオルでごしごしふきながら、

「無事でえかった」^{*}

と笑った。

ぼくの目から落ちた涙が、ぽつぽつと、新しいスニーカーのつま先をぬらす。

それをタビが、ぺろりとなめた。

自転車で何時間も走ったせいかな、翌朝はずいぶんおそくまで寝てしまった。

目が覚めるとタビはもうそこにいなくて、部屋ががらんとして見えた。太ももの筋肉が少し痛いし、日焼けした頬や腕がひりひりする。

食器を洗って、部屋を少し片づけてから事務所に行くと、ドアの近くにできた木陰に、希沙が立っていた。ぼくと一緒に家から出てきたタビが、うれしそうにしゃべっている。

「おはよう」

と笑顔の希沙に言われたけれど、

「おはよ」

と返すぼくは笑えなかった。こんなふうに、希沙は突然やってくる。それなのに、ぼくが行ったときにはいないなんて X だ。

もちろん、それは希沙のせいじゃない。ぼくが電話をして行けばよかっただけのことだ。ただそう思えば思うほど、「いつ来てもいいよ」と言っていた希沙が頭にうかんで、ゆるせない気持ちになってしまう。だから

「昨日はごめんね。せっかく来てくれたのに」

と言う希沙に、ぼくは小さな声でぼそりと

「べつに、いいよ」

と返事をするだけだった。

それでも希沙は、いつもの調子で明るく話しかけてきた。
「真潮はもう、宿題全部終わった？ 自由研究、あたしは五人のグループで海に流れ着くゴミを調べたの。夏休み前からゴミ拾いして、たいへんじゃった*」

その声を背中で聞きながら事務所に入った。おじいちゃんがエアコンをつけていてくれたから、中はもうひんやりしている。タビもしっぽをふりながら入ってきて、ぼくを追いこして奥に行ったけれど、希沙はついてこなかった。

ふり向くと、希沙は木陰に立ったままでぼくを見ていた。
そして、少しおどおどした感じで、
F

「真潮、あたし、うっとうしい？」

と聞いた。

「そんなこと……」

ない、とは言えなかった。正直に言うと、さつきからしゃべりかけてくる希沙にイラついていた。ぼくがムツとしていることが、どうしてわからないんだとあきれてもいた。だけど、そんなふうと思う自分もいやだった。

だまりこんでしまったぼくに、希沙は

「あたし、思ったことがすぐに口から出てしまうし、よく

考えずに行動して、しょっちゅう友だちをおこらせる。気をつけようと思っても、なかなか治らん。真潮は初めて会ったときからやさしくて、あたしの話をちゃんと聞いてくれたから、調子に乗ってしまったかもしれない。ごめん」と言った。いつも言いたいことを言って、何でも自分のペースで進めていくように見える希沙から出た言葉におどろいた。

でもそういえば、初めてここに遊びに来たとき、希沙は**多くの「何しに来た？」***というひと言に傷ついていた。希沙は決して無神経でもお調子ものでもないのだ。

「希沙は」

とぼくが口を開くと、希沙は真剣な目をしてうなずいた。

「自分のペースで行動するし、ぺらぺらしゃべるし、自分勝手だなんて思う」

「……そうか」

「でも、いっぱい笑うし、一緒にいると楽しいし、タビやカメラと話もできる。ハチの種類も、犬がおならをすることも教えてくれた」

「うん」

「オレ、話すのが苦手だし、暴れたり椅子いすをふり上げたり

してクラスでういとる。^{*}でも、希沙はぐいぐい話しかけてくれたから、友だちになれた」

そう言いながら、ぼくは思った。

何でもまっすぐに言える希沙のことが、ぼくはたぶんうらやましかったのだ。

ぼくはいつもだまっただままで、わかつてほしいとか気づいてほしいとか、そんなふうに思うばかりだった。ぼくの気持ち言葉をできるのは、ぼくだけなのに。

エアコンの音が、低く聞こえる。

「真潮、自転車で遊びに行こうか」

希沙が言うから、ぼくは大きくなずいた。

それからぼくらは自転車で坂を下り、道路を左に曲がった。潮風にふかれながら希沙の後ろをついて行き、海岸につながれている漁船やクルーザーのそばを通った。

しばらく行くと自転車をとめ、波止^{はと}という、砂浜^{すなはま}からつき出たコンクリートの一本道を二人で走った。ただ走っているだけなのに、^Gぼくも希沙もすごく笑った。

（中山聖子『この手はいつか』による。

なお、問題文の一部を省略している。）

【注】

* 加瀬谷——希沙の母が経営する「町家カフェ 加瀬谷」。

希沙の家でもある。

* なまこ壁——瓦をならべ、はりつけた壁。

* 来てくれたん？——来てくれたの？

* 行ったんよ。——行っただのよ。

* 自由研究せんといけん——自由研究しないといけない

* 事務所——祖父の作った萩焼が置かれている事務所。

* タビ——祖父の飼い犬。

* えかった——よかった

* たいへんじゃった——たいへんだった

* 何しに來たと？——何しに來たの？

* ういとる。——ういている。

問一 ―線部A「希沙のお母さんは大切なお皿を割ってしまったときのような顔になった」とあるが、真潮が加瀬谷を訪れた場面における希沙の母親の気持ちとしてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 暑い中来た真潮が希沙と会えずに心苦しい気持ち。

イ 真潮が一人で遊びに来たと聞いておどろく気持ち。

ウ 連絡もせず遊びに来た真潮を非常識だと思う気持ち。

エ 希沙が出かけてしまっていることを残念に思う気持ち。

問二 ―線部B「強い光と熱い空気が、ずしんと重く感じられる」とあるが、真潮がこのように感じるのはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 希沙とはお互いの家を行き来する関係だったが、遊びたい気持ちをわかってくれない希沙の母親に追いつかれ、腹立たしさがこみ上げてきたから。

イ たまたま自転車で出かける途中、希沙の家に立ち寄ろうと思っていたが、希沙は不在で、午後になって暑さが一段と増したように感じられたから。

ウ 今日は希沙と家で待ち合わせる約束をしていたのに、希沙は友人との約束を優先しており、見当違いな希沙の母親の気づかいが重く感じられたから。

エ 希沙にいつでも遊びに来てと言われて、楽しみにしていたのに、実際に来てみると希沙はいなくて、悲しみと怒りがこみ上げ、沈んだ気持ちになったから。

問三 ―線部C「そんなことはわかりきっているのに、ぼくはそこから離れられなくなってしまった」とあるが、それはなぜだと考えられるか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア このまま家に帰ってしまったら、一人で自転車に乗って遠くまで来た意味がなくなってしまうので、せめて駅で知り合いと会えるまで時間をつぶそうと決意したから。

イ 大阪にいる母親がこの駅に来ることはないとかわかっていても、万が一自分を迎えに来ることになったらこの駅に降りるという可能性を捨てきれないほど、母親に会いたいから。

ウ 自分の帰りがおそくなるとおじいちゃんがおこってしまうことはわかりきっているけれど、厳しい暑さの中で自転車をこぎ続けたので、立ち上がれないほど疲^{つか}れてしまったから。

エ 母親が自分のもとへ大阪から会いに来るときにこの駅で待ち合わせることはわかりきっているので、すれ違わないように母親と会えるまで駅前で待とうとかたく心に決めたから。

問四 ―線部D「おじいちゃんは、ぼくがおそくなってしまったことを、きつとおこっているだろう」とあるが、真潮が帰ってきたとき、実際に真潮の祖父はどのような気持ちだったと考えられるか。説明しなさい。

問五 ―線部E「それ」の指すものを本文から十二字で書き抜きなさい。

問六

X

にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 不可欠 イ 不気味 ウ 不公平 エ 不十分

問七

――線部 F 「少しおどおどした感じで、「真潮、あたし、うつとうしい？」と聞いた」とあるが、希沙は自分のどのようなところが「うつとうしい」と考えているのか。説明しなさい。

問八

――線部 G 「ぼくも希沙もすぐく笑った」とあるが、ここからワテンくんと呼ばれていた真潮の成長が読み取れる。真潮はどのように成長したのか、理由をふくめて七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権保護のため掲載を控えます

著作権保護のため掲載を控えます

著作権保護のため掲載を控えます

著作権保護のため掲載を控えます

問一

——線部A「私は、本を読んでくれた人たちの感想が気になって仕方なかった」とあるが、これはどのような状態だと
言えるのか。解答欄に合うように、本文から十二字で書き抜きなさい。

問二 【 1 】、【 2 】にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もし イ しかし ウ だから エ たとえば

問三 — 線部 B 「私たちがこれほどまでに自分が「他人からどう思われているか」を気にするのは、人間の進化にその理由がある」とあるが、「人間の進化にその理由がある」とはどういうことか。説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集社会では嫌われないように「外のスコアカード」を重視していたが、個人のつながりが薄くな^{うす}ってからは「内なるスコアカード」を重視するようになったということ。

イ 狩猟採集社会の頃から人間には自分の評判が悪くなることを恐れる「感情のスイッチ」があり、一万年ほど前から現在に至るまでスイッチの設定は強まり続けているということ。

ウ 狩猟採集社会では一人でも生きていくことができたが、町や村などの集団の中では、つまはじきにされると生きていけなかったので、うわさ話がさかんになっていったということ。

エ 狩猟採集社会では集団の中で生き延びるために他人からよく思われる必要があり、お互いに顔を合わせることで減ったからは見えない他人からの評判を気にして生きているということ。

問四 — 線部 C 「感情のジェットコースターに乗っている時間を節約できるから」とあるが、ここでいう「感情のジェットコースターに乗」とはどのようなことになることか。説明しなさい。

問五

X

にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 本当の自分 イ 外向けの自分 ウ はずかしい自分 エ 違和感いわけんのある自分

問六

――線部D「アプルーバル・シーキング・マシン(他者からの承認を求める機械)」とあるが、私たちがこうなってしまう要因として、考えられることは何か。説明としてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 集団の中で他人の評判を気にしながら生きていくのは、人間の本能であるということ。
イ ソーシャルメディアの世界の中で、自分のランクを数値化したものにとらわれること。
ウ 年を重ねるうちに、他人からの評判は自然と自分にふさわしいものになっていくこと。
エ 子どものころ、自分が何をするかよりも世間にどう思われるかを基準として育てられたこと。

問七

――線部E「一番大事なのは、あなた自身がどう判断するかなのだから」とあるが、筆者の考えについて次の問いに答えなさい。

- (1) 筆者は、現代をどのような社会だと考えているのか。説明しなさい。
(2) 筆者は、現代人はどのように生きるべきだと考えているのか。説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① カブシキ会社を設立する。
- ② コクモツもバランスよく食べる。
- ③ 彼女の演技はアツカンだ。
- ④ ニュウシが生えかわる。
- ⑤ 前の席がアいた。

